



日本語研修とホームステイ

～スウェーデン高校生訪日研修～

IFAは4月、在スウェーデン日本国大使館の紹介を受け、スウェーデン・ストックホルム県のポートシルカ市立トンバ高校の訪日研修を実施運営した。

同校の東洋言語学コースで日本語を専攻する2年生に対し、日本語学習のレベルアップと日本文化理解を目的とし、同市が費用負担しての初の試み。

8名の高校生が3週間の日本滞在の間、ホームステイをしながら日本語学校に通い、高校訪問や様々な文化体験を通してどんなことを感じ、何を学んだのかを振り返ってみる。

◇

来日日、宿泊先近くの増上寺で満開の桜の下開催されていた神楽の奉納、お練行列が一行が目にする最初の日本体験になった。オリエンテーションではIFA日本事情講義を受けた後、第1週は都内の日本語学校(特設コース)に通い日本語を勉強した。現地では通常週1回の授業だったが来日研修が決定した今年に入ってからは週2回に授

業を拡大し来日に備えた。

現地ではなかなか本気で授業に取り組めなかった生徒たちが、日本では皆やる気を見せ、楽しそうに学んでおり、引率教師を驚かせた。社会保障の進んだスウェーデンでは授業料は無料、教材も貸し出されるという。自分の教科書を持ったことがない彼らには、初めて手にする自分の教科書に名前を書くことすら戸惑いを覚えていた。

来日2週目、一行はそれぞれのホームステイ先から自力による電車通学を体験した。朝のラッシュ時に日本の高校生が普通にしている電車通学が果たして大丈夫なのかという点が当初最も心配されたが、ホストファミリーのご協力もあり皆、これを無事やり遂げた。もっとも初日、女子1名が途中の乗換えを間違えて終点まで乗車して気付き、周囲の日本人の協力を得て乗換駅まで戻った後、結局1時間半遅れて学校に到着。照れくさそうにしていた彼女は翌朝、誰よりも早く学校に登校した。

週末はホストファミリーと遊んだり、英語教室の生徒と仲良くなったり、竹林で筍掘りを体験したりと、思い思いに過ごした。普段あまり話そうとしなかった生徒が英語と日本語で楽しそうに話したり、試験は出来るのに皆の前では積極的に日本語を話せなかった生徒がホームステイ中は、ほとんど日本語だけで過ごしたりと、家族をはじめ周囲の環境と彼ら自身の自覚が個々の潜在能力を引き出す形となった。

ホームステイと共に最も楽しかった



ホストファミリー8家庭とともに

と語るの、神奈川県・横須賀総合高校での交流。前の晩は興奮して眠れなかったくらい最初は緊張していた8名も、次第に目を輝かせて広い校内を歩き回った。防具を身につけ、へっぴり腰で臨んだ剣道。日本語で自己紹介した後、質問を交わし合った異文化理解講座や生徒会役員との懇談。来日前に一生懸命練習してきたスウェーデン紹介の発表や合唱など、どの顔も少しの恥じらいと大きな自信に溢れていた。

◇

帰国後、9月から3年生になる一行から、当初予定にはなかった3年次の日本語授業を是非実施して欲しいという要望が出されたという。万事にのんびりして自分の将来や可能性を信じ切れなかった生徒たちが、自らの意思を表に出し、新たなことに挑戦する姿勢が見られたことは一つの大きな成果であろう。先駆を切った彼らの3週間にわたる自分との闘いに拍手し、今後の成長を静かに見守っていきたい。

世界万華鏡

国際ジャーナリスト 吉田 鈴香 シリーズ⑤

日本ブランド

世界各地を取材と調査で回る仕事をしていて痛感するのは、「日本人」であることのありがたみである。ありがたみは、文字通り「有り難い」。実存すること自体が難しいすばらしい有り様を意味する。「行きたいなあ」と、皆さん関心を示してください。

まずは途上国と紛争地を回って言われる「日本人」のイメージとは、

1. 傲慢さなく親切で礼節を持つ人々。よく話を聴いてくれる。
2. 高度な文明と高い技術力を有し、クリーンな国土、澄んだ空気の中で暮らしている。
3. 平和な軍を持っている。
4. 女性が可愛い。

先進工業国の人々からは、

1. 民主主義国の人々だから意識が近く、意見を共有できる。
2. 礼儀正しい。お辞儀をする。
3. 電化製品、消費製品の品質がよく、製品も人も信頼できる。
4. 平和で軍律が厳しく行き渡っている軍を持っている。
5. 女性には、社交的でどんなところでも入り込み、現地社会に溶け

込む人と、保守的で夫の後ろから歩くタイプと2種ある。男性は皆画一パターン。

このように良いイメージを持っていると、取材をする私には大変好都合である。警戒心なく話していただけるからである。3月～4月にかけてソマリア関連の取材のため周辺国を取材して回ったときも、非常に協力的な人が多く驚いた。帰国後も頻りに電話とEメールの交換をしているが、「日本人のスズカだから」と相当踏み込んだ話を語ってください。

私は考えた。さて、これは私が日本人だからだろうか、女性だからだろうか、それとも私だからなのか。たぶん、3つともがよく作用しているのだろう。

私は外国の方と会う時には、必ず日本流のお辞儀をする。いったんピンと背筋を伸ばしてから、腰を折るようにゆっくりと頭を下げる。先方は大変感激し、あわてて同様に頭を下げてください。上半身を傾げるまではできない。お辞儀の仕方をご存じないからである。私はこのお辞儀の間、先方の頭のとっぺんからつま先までじっくり観

察する。これで大体の人物像は分かる。頭を上げながら用意した質問の順番を組み替え、質問第1号を決める。

ところが人によって、お辞儀をされて逆に威張る人もいる。自分が偉いと勘違いをするのだ。お辞儀への反応で、その人の人柄と教育レベル、日本人へのイメージを窺い知れて面白い。

情報(諜報)活動が大事だと訴える方が往々にして、強面の人相をしていることがあるが、それは私の経験では本物の情報専門家ではない。本当の情報専門家は実に社交的、明るく笑顔である。また会いたい、話したいと思わせる。良質の製品と上品な人間を生む国、あこぎな商売をしない正直な国。そのイメージに守られて私は仕事をさせていただいている。

平成21年5月17日発行
社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ502
発行責任者: 及川 伊佐子
編集: 事業部 03(3582)3021
印刷: 音和堂印刷



色彩を通して見る日本文化

カタール女子大の日本研修

3月20日、ヴァージニア・COMMONウェルズ大学カタール校で色彩・デザインを専攻する女子大生グループが来日し、東京・奈良・京都を巡りながら日本の色彩についての見聞を深めた。IFAはこれまでもGCC（湾岸協力会議 the Gulf Cooperation Council）諸国の教育者への訪日研修を担当してきたが、「色彩」をテーマとする専門研修は初めて。講義、現場視察を軸に、文化体験をしながらの一週間の研修は、日本の伝統文化と、古代より現代に至るまで脈々と流れる日本人の色彩感覚に触れる旅となった。



今回来日したのは17歳～19歳のカタール人女子大学生4名と米国人教授2名。研修初日に行われたオリエンテーションでは、まず、日本人の生活習慣についてスライドを見ながら全体像を把握。日本文化の歴史の講義では、時代によって変化する色彩の捉え方、四

季に対する日本人の意識、建築・装束・美術品等の特徴などについて学んだ。また、世界的に有名なファッションデザイナーの事務所も訪問し、一般公開前の秋冬物コレクションも見学。華道の体験では自由花型を自らの色彩感覚で活けた。歌舞伎鑑賞も行き、華やかな衣装と独特の化粧の中に、芸術としての彩を堪能した。

後半は関西に移動。まず、奈良文化財研究所を訪ね、その道の権威より日本建築の色彩について講義を受けた後、国宝級の寺社や仏像を見学。全く歴史や文化習慣の違う日本で、はるか昔、自らの住む地からシルクロードを通過して奈良の都にもたらされた文化の跡を辿った。京都では今回の研修のまとめともなる「日本の色彩」について講義を受けるとともに、着付け、友禅染め、茶道等も体験した。



デザイナー滝沢直己氏の事務所を訪ねて

駆け足の研修ではあったが、日本と言えば平成生まれの女子学生たちが、古墳時代から現代にまで、日本の中に息づく色彩について積極的に学んだ。遠くカタールの地でどんな形でこの研修が開き、新たなデザインやファッションを生み出していくのか。彼女たちの感性と今後の展開に期待したい。

世界万華鏡

日本語教育 ながほすみお 永保澄雄 シリーズ⑩

こっちの水は甘いぞ

ほうほう蛭こい
あっちの水は苦いぞ
こっちの水は甘いぞ
子どもの頃、蛭狩りについて行ってこの歌を歌った覚えがある。

甘い水で蛭をおびき寄せるわけであるが、子ども心に甘い水があるのだと思った。大人になってから、おいしい水とおいしくない水があることを知った。若い頃、関西汽船の貨客船でタイへ行ったことがあった。その時の水はおいしかった。パーサー（事務長）が「本船は神戸で水を積みますから」と教えてくれた。長い航路の船は多少まわり道でも神戸港に寄って水を仕入れていくそう。六甲の水を積み込むわけである。着いたタイでは生水はあぶないと言われ代わりにコーラを飲んだ。

そのあと2年ほどインドネシアに住んだのであるが、頼めば飲料用の水を大きなガラス瓶に入れて配達してくれ、時には水を担いだ水売りがやって来た。現地の人は水道の水もそのまま飲んで何ともなかったが、我々日本人が生水を飲むとお腹をこわした。

それで奥様方はお手伝いの女性に沸かしたお湯を冷蔵庫で冷やしておくようにと言っておくのであるが、それで

もお腹をこわすことがある。手を省いて水道の水をそのまま入れて済ませることがあるらしい。それで考えて紅茶にして入れておくようにと命じた奥さんもいた。確かにお湯でなければ紅茶の色は出ない。

1975年9月から1年パリにいたが、そのとき身近にミネラルウォーターを見た。水道水はおいしくなかったので、やはりこういう水が必要なのだと思ったが、フランス人がよく飲むエビアンやコントレックスは舌に合わなかった。知り合いの商社夫人が「いろいろ飲み比べましたが私たち日本人には軟水のヴォルヴィックが良いと思います」と教えてくれた。それで滞在中はヴォルヴィックばかり飲んだが、やはり飲みやすく、そしておいしかった。日本に帰ってからはしばらくしてヴォルヴィックに再会したが懐かしい気がした。

その頃の話であるが、家の近くの雑貨屋に国産のミネラルウォーターを置くようになった。それを買に行ったら、「水を買うようになったらおしまいよ」と言ったので驚いた。なら売らなきゃいいのにと思ったのであるが、またそれもそうだと思ったのである。

インドネシアに次いで長くいたのは

ニュージーランドであった。首都のエリントンに4年間いたが、ここでは水道の水をそのまま飲むことができた。しかも大へんおいしいのである。大使館のご婦人が、「ここでは紅茶がおいしく立ちますの。腕があがったのかと思いましたが、お水のせいでしたわ」と言って笑った。紅茶の方がコーヒーより普及しなかったのは水のせいか。

日本では大阪と京都に長く住んでいたが、その水のことはここでは触れないことにする。ただ年に何回か帰る、自宅の焼津の水道の水はおいしい。富士山の地下の水脈と関係があるのだろうか。今住んでいる東京から新幹線で静岡へ行く間、ヴォルヴィックの小さいペットボトルを車中に持ち込むことがあるが、帰りにはその空いたペットボトルに焼津の水道の水を詰めてまた東京に持ち帰るのである。

平成21年4月17日発行
社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ502
発行責任者：及川 伊佐子
編集：事業部 03(3582)3021
印刷：音和堂印刷



ジュニア大使の家庭を訪問

GCC 諸国人材育成訪日研修事業

(社)国際フレンドシップ協会(IFA)では毎年、夏休みと春休みに「ジュニア大使友情使節団」を海外に派遣している。今年も24年目を迎え、これまで延べ3,667名のジュニア大使が誕生し、さまざまな交流を通して世界各国との友好親善に大きな成果を上げている。帰国後の活動の場として任意に組織している「ジュニア大使クラブ」では、今般、今夏の「シアトル班」に参加した団員4家庭でGCC諸国の教育関係者をホームビジットで受け入れた。



GCC 諸国、すなわち the Gulf Cooperation Council: 湾岸協力理事会は、アラブ首長国連邦、バーレーン、クウェート、オマーン、カタール、サウジアラビアの6ヵ国から成る。今回の研修は、オマーンを除く5ヵ国8名の教育関係者を日本国外務省(主管: 中東アフリカ局中東第二課)が招聘、IFAは11月9日から23日の間、研修プログラムの企画実施運営を行った。



一行は、日本の教育制度に関する研修や各種教育機関の視察を行う一方、自国の教育システムを各所で紹介し、積極的な意見交換が行われた。

◇

週末の土曜日は来日当初から楽しみにしていたホームビジット。それぞれのご家庭に到着するやいなや、家族全員に明るい笑顔で迎えられ、すぐにうちとけあった。中学2年生のジュニア大使たちは、英語で家の中のことや学校生活について積極的に話し、「模試」のことを頑張って説明した生徒もいた。女性参加者に同行した弟がUAEのプロサッカー選手と知り、あわてて近所

の文房具屋に色紙を買いに行き、サインをいただいた家族もあった。



祖母も会話に加わった家庭では、参加者からの「昔のことを聞かせて」との問いに、「戦争があったのであまり覚えていません。戦争は2度とあってはいけません。平和が大切です」答え、一同頷きあった。また、東京滞在中に買い求めた「東京パイ」をお土産にと手渡し参加者には、皆で大笑い。家族と親戚が集まると500人になるという参加者は、コンピューターを使って世界写真地図サイトから自分の家を見つけてホストファミリーに紹介した。終始、各家庭で英語、日本語、アラビア語の飛び交う、実り多い一時となった。



世界万華鏡

日本語教育 ながほすみお 永保澄雄 シリーズ⑩

もとのうた その2

台湾には日本人によく知られている『雨夜花』(ウーヤーホエイ)という歌がある。私がこの歌を知ったのは、もう50年も前のことだ。当時大学で留学生に日本語を教えていたが、教室で各国の歌をそれぞれの国の学生に歌ってもらったことがあった。台湾から来た何人かの学生が歌ってくれたのは、しみじみとした哀調があって、いい歌だなと思った。それで歌詞と発音を覚えてもらった。

雨夜花	雨夜花
受風雨	吹落地
無人看顧	毎日怨嗟
花謝落土	不冨回

口移しに伝授されたその閩南語(みなんご)を片仮名で書くところなる。

ウーヤーホエイ	ウーヤーホエイ
シューホンホー	ツェイロテー
ボーダン	コフヌキー
ムイリーウアヌ	ツオエイ
ホェシャーロート	プッツアイホエイ

日本語の歌詞も教わったが、それで歌うと演歌調になって原詩の味わいがない。

夜の雨に 咲いてる花は
風に吹かれて ほろほろ落ちる

これを日本語で歌うと、このほろほろを強調することになる。そういう歌ではないと、日本語で歌ったことはなかったが、この歌は歓楽街で働く女の人の哀しみを歌ったものだそうだ。

台湾に前から移り住んでいた中国人のほとんどは福建省から来た閩南語を話す人たちで、その次に客家(ハカ)の人たちがいる。この歌には、花、地、など終わりの字に脚韻が踏んであって、その「エイ」という第四声の響きがこの歌をさらに哀切なものにしている。それで私は怪しげな閩南語らしき発音でこの歌を歌い好評を博していた。

ところが最近、仰天することがあった。この歌は、もと日本の軍歌であったそうなのだ。教えてくださったのは中国語の専門家である高木桂蔵先生である。私が発音を直していただくとうこの歌を歌ったところ、即座に、「あ、これは台北あたりで歌われている歌の方ですね」とおっしゃった。そしてそのあと、先生が前について書かれた記事のコピーを送ってくださった。日本子守唄協会が2007年7月に出した『唄いつく』という本

の中にあるらしい。それによると、日本の統治下にあった台湾の若者たちが軍夫として借り出されたときの入営の嬉しさを歌ったものだそうだ。今の我々日本人としては心痛む話であるが、歌詞はこうなっている。

あかいタヌキに 誉れの軍袴(ゲンコ)
僕はうれしい 御国の軍夫

我ら後期高齢者なる人間にとっては、「あかいタヌキ」も身近であり、「軍袴」という言い方も懐かしい。私は中学のとき、陸軍衛生材料部に動員され、うっかりズボンのポケットに手を突っ込んでいて、上官である指導係の兵隊にどなられた。「こらっ、そこのぼうず、左軍袴のかくしに突っ込んでいる手を出せ。これからはかくしは縫っておけ」。

それにしても「僕はうれしい御国の軍夫」などという歌がどうして夜の雨に咲いている花が風に吹かれてホロホロ落ちることになってしまうのだろう。

平成20年11月17日発行
社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ502
発行責任者: 及川 伊佐子
編集: 事業部 03(3582)3021
印刷: 音和堂印刷



カタールから教育者来日

ハディージャ女子小学校長一行

IFAではこれまで、GCC（湾岸協力理事会：the Gulf Cooperation Council、中東地域における加盟国間の軍事、経済、文化などの地域協力機構。アラブ首長国連邦、バーレーン、クウェート、オマーン、カタール、サウジアラビアの6ヵ国が加盟）からの教育関係者の訪日研修を外務省の事業として実施担当してきた。

その中で、カタールでは3年前より教育改革の一環でモデル校をつくり、新しい教育システムの導入に力を入れている。今般、在カタール大使館からの要請により、日本の教育システムの研修を希望しているモデル校、ハディージャ女子小学校の校長と教頭ならびにそれぞれのご主人一行をIFAが受け入れ、日本の教育制度に関する研修や各種教育機関の視察を行った。

5月11日～20日までの日本滞在中に、日本事情オリエンテーションとしてIFA講師による「日本の文化と歴史」ならびに「日本の教育制度」の講義を実施。またスライドを用いて日本の生活習慣も紹介した。

東京、箱根、京都と回り、日本の教育制度のみならず、日本の文化や歴史に触れ、一般家庭の訪問も行った。

都下の私立小学校訪問では、自国、カタールの紹介を日本の子どもたちに行い、アラビア文字をカタールの先生が黒板に書くと、「わぁー」という児童から歓声上がり、その後、質疑応答も行われ、よい交流の場となった。

また、都内の公立小学校では、行き届いた校内の設備に一行は感心し、子どもたちと給食もともに食べながら懇談した。

実地研修では、国ならびに都の教員研修の視察も行い、参加者からは活発な質問がなされた。



また、「環境教育」についても都内の施設を訪問し、小学校と連携した環境教育・啓蒙を目の当たりにすると、大切な教育項目と感心していた。



文部科学省を訪問して

週末のホームビジットでは日本の一般家庭の生活に触れ、「日本の母親は家のことをうまく取り仕切っている。カタールと同じ」と話し、茶道のお手前もいただき、日本の伝統文化にも親しんだ。

東京での講義や視察訪問を終えて、一行は、「カタールの価値観は西欧よりもアジアに近く、教育制度においても日本式のほうが馴染むと思っていたが、今回の研修でその思いを強くすることができた。日本滞在中で得た多くの知識を分析し、今後のカタールの教育システム構築に役立てたい」と語っていた。

今後、ますます日本とカタールの教育交流が活発化することが期待される。

世界万華鏡

国際文化交流 おおつきりさこ 大月理沙子

明治時代、海外の日本への目

来日した中近東の教育者から「自分たちは宗教によって物事の良し悪しを学ぶことができるが、日本人には昔からの道徳的基盤はなかったのか」と聞かれた。そのとき、明治時代に米国で書かれた「教育勅語」に関する記事を読み出し、昔からの道徳基盤はあると私見をお答えした。もちろん、教育勅語は大戦後、「主権在君並びに神話の国体観に基いている」ことにより排除・失効確認の議決がなされていることは押さえる必要はある。その記事は、1910年に米国マサチューセット州・ボストンで発刊されている新聞、「THE TECH」で、タイトルは「本日、日米両国にて著名な教育者、菊池男爵が講演」。以下、その記事の和訳をご紹介します。



「本日2時、ハンティントン・ホールの集会で、日本の帝国大学総長、菊池男爵が講演を行う。菊池男爵は、海外でも卓越した教育指導者として著名。イングランドのケンブリッジ大学で学び、母国へ帰国後、教育行政の任に就いた。1877年に同大学を卒業し、高学位を取得している。

「日本では、米国の閣僚にほぼ匹敵する文相に就任。元東京帝国大学総長、最近、京都帝国大学総長に就任した。

「菊池男爵は、あるニューヨーク・ソサエティーの招聘により、米国全土で講演を行っている。これまでの講演では日米関係について触れてきたが、満州鉄道の中立化をめぐる昨今の外交課題について議論した場も一度ならずあった。中立化の動きは、日本がようやく手中にした満州鉄道の返還を求め措置とみる見方が主流である。

「講演の主題は発表されていないものの、男爵の訪米ミッションが半政治的性格のものであることから、幅広い分野に選択の余地がある。

--中略（「教育勅語」英訳紹介）--

「日本帝国の国政の継続性を示すため、一昨年発令された後述のような詔勅の文言が、教育勅語の条文に併記されているのは興味深い。

『急激かつ留まることのない文明の進展により、相互依存と共助の関係にある東西の世界が共通の利害で結ばれていることを確信する。わが国は、世界の他の列強国とより緊密な関係を締結し友好関係を強化することにより、それらの国々と共有する文明の恩恵を久しく享受し続けることを切に望む。』

『世界が絶えず進歩を遂げる歩みに呼応し、文明の恩恵を共有するために、今や、わが国の持てる資源である国民

の能力を開発せねばならぬことは明白であるが、戦争の疲弊からようやく台頭したばかりのわが国は、行政のあらゆる部門に一層の努力を注がなければならない。従って、国民は最も高貴なものから卑しいものに至るまで、心を一つに精進し、誠心誠意それぞれの天職を遂行し、勤勉で慎ましく、誠実かつ高潔であり、質素で思いやりを持ち、虚栄虚心を廃し、有益かつ堅実なるものを追求し、怠慢と道楽を避け、絶えず困難な任務に専念すべきである。』



もう一つ、この時代、アルベルト・アインシュタイン（1879 - 1955）が残してくれた言葉を紹介したい。

「世界の人類は欲に駆られて争いと混乱を繰り返し、最後に疲れる時が来る。その時、世界の人類は真の平和を求めて世界の盟主を求める。それはあらゆる国の歴史を超越する尊い国『日本』である。我々は日本を存在せしめた神に感謝する。」

平成 20 年 5 月 17 日発行
 社団法人 国際フレンドシップ協会
 〒106-0041 東京都港区麻布台 3-4-12
 麻布台ロイヤルプラザ 502
 発行責任者：及川 伊佐子
 編集：事業部 03(3582)3021
 印刷：音和堂印刷刷



「和の国、日本」を訪ねて

中国・香港報道記者招聘事業

平成17年10月24日、「中国・香港報道記者招聘事業」(外務省大臣官房国際報道官室主管/社団法人国際フレンドシップ協会実施運営)に参加する新聞記者が来日した。本事業は参加記者に日本の魅力を紹介しながら、日中間の協力や草の根レベルの友好活動、日本人の日常生活や考え方についての取材、視察等を通じ対日理解の促進を図ることを目的とし、11日間の滞在期間中、各種懇談・意見交換を行った。

◇
今回来日したのは上海、広州、瀋陽、成都、香港に在住の若手新聞記者7名(29歳~38歳。男性3名、女性4名)。今年4月、中国各地で反日デモが相次ぎ、また直前には小泉総理の靖国神社参拝もあり日中関係が敏感な時期の来日であったが、当初、主に政治面に向けられていた彼等の関心が次第に日本の文化、市民生活に及び、伝統と現代が融合している日本社会との出会い、

日本人との交流等を通して徐々に内なるわだかまりを解きつつあるように見受けられた。

都内の訪問先で、日本の高校生が中国語を学んでいる姿や中国の奥地で毎年植樹を続けているボランティア活動につき説明を受け、世代を超えて多くの日本人が中国に理解、協力を示し個々に努力している現状を知った。中国で日本語教師をしていた青年海外協力のOB隊員との懇談では、反日の雰囲気の中、辛い目に遭ったものの親身になって支えてくれたのも身近な中国人だったとの体験談を皆、頷きながら真剣に聞いていた。また、新聞社訪問では日本の新聞社の現状や報道の姿勢、日中間に横たわる様々な問題につき日本側の記者と意見交換を行った。

地方視察先の京都では紅葉が進む秋の古都を満喫。渡月橋を臨む嵐山の美しさに感激し、世界遺産の金閣、清水寺では修学旅行中の学生と談笑し、軒を並べる土産物屋では珍しそうに京風小物を眺めていた。食事も自ら和食を選ぶ記者が多く、材料、料理方法などを店の人に尋ねる者も多かった。広島では原爆ドーム、平和記念資料館、宮島を訪ねた後、家庭訪問も体験。茶道教室を開く奥様がお弟子さん方とともに本格的なお点前でもてなしてくれた。また折から行われていた秋祭りに出くわし各地区の御神輿の競演を見学する幸運にも恵まれた。誰彼となく声をかけられ御神輿を担がせてもらったり、



御神酒をご馳走になるなど分け隔てなく接してくれる町民の姿に皆感動し一緒にカメラに収まった。

「日本人はなかなか本音を言わず真の友人になるのは難しい」と来日前の印象として書いた広州の記者(32歳、女)は、来日後の印象として「日本人の飾り気のない熱心な態度は予想外で、知り合った日本人も思うところを話してくれた。今は日本人と友人になるのは決して難しいことではないと思う」と書き、「生涯にわたり両国の交流と相互理解促進のために新聞記者として全力を尽くしたい」と結んでいる。日本で初めて顔を合わせた7名の記者が一緒に「日本人の多くが平和と日中両国の友好関係を望んでいることを知った」と語っていることは日本の姿がいかに正しく中国国民に伝わっていないかの表れとも言えよう。今回の日本体験をそれぞれの中でどう吸収、理解し、市民の代弁者として中国社会への提言を行っていくのか。爽やかな若手記者たちの勇気と感性、筆力に大いに期待したい。

世界万華鏡

“まいどー”の小父さん その3

枯れタンポポ

「ずっと後になって“まいどー”の小父さんの歌は有名な“アランの唄”だったこと、もう一つは“トラジ”と知りました。その歌声に圧倒されて床の中から仰ぐように見つめていた小父さんの頬に光る物が走りました。涙でした。見てはならない物を見てしまったようで私は戸惑いました。『ハハハハ、へだネ』と言いながら小父さんは腰のタオルでグシャグシャと顔を拭きました。ひとしきり母と祖母の拍手が続き、恥ずかしそうに立ち上がった小父さんはペコリと深いお辞儀をすると胸を張るような、それでいてスグスグとした様子で『ポっちゃん、早く元気にね』と言いながら帰って行きました。

「それは確か私が7歳の夏のことでしたが、その日以降小父さんはプツリと来なくなってしまいました。樺太へ行ってしまったのか、あるいは「みんな良い人ばかりの良い国」に帰ったのか…“まいどー”の小父さんは今も思い出の中の大事な人になっています」

幼かったころの日々、我が祖国が隣国の人々に与えた恥ずべき行いへの痛惜の思いを“まいどー”の小父さんの思い出とともに語り終えた時、英鶴(ヨ

ン・ハク)が黙って厚い手を差し延べ私はそれをきつく握り締めた。我々には弟分の春寧(チュム・ニョング)も手を重ね、何か昔からこんな3人だったような気がした。英鶴に「私達は今日から兄弟になりましょう」と言われて私は少々戸惑いながら「あぁいいですね。朴先生」と応えた。英鶴が「いいえ、弟に先生では困ります。英鶴と呼んでください。そして私たちには兄さんと呼ばせてください」と言って微笑んだ。何だか大袈裟な気もしたが、英鶴の気持ちを嬉しく受け止め、きっと明日になれば先生呼びに戻るだろうと自分を基準の失礼な考えをしてしまった。翌日、若い職員が付き添って関西へ行く二人を東京駅まで送った私に英鶴は「兄さん、昨日はありがとうございました。今日も懇々来てくださって」と微笑んだ。春寧も「兄さん、昨夜は良く寝ましたよ」と笑った。こんな風にして我々3人の兄弟関係は始まった。英鶴からの便りはいつも兄上様で始まり英鶴拜上で終わる。E-mailではお兄さんとする。最初の返信に朴英鶴大兄と書いたら電話で叱られ、「愚兄より賢弟へ」と直したがやはり叱られて、

以後は英鶴さんで通している。達者だった頃の母の誕生日には“御慈堂様”で始まる優しい文章に韓国の息子英鶴で終わるカードが前日か誕生日に届く。母が亡くなった時は、春寧と二人で直ぐ飛んで行くと言われて有り難いが遠慮してやっとなどめた。今も月に2回ぐらいは爺婆二人暮らしを気遣って電話をくれたり「姉さん」と病妻の体を案じてくれる。

竹島問題では結局「主張し合うより日韓が世界に先駆けて領土紛争地は両国共管の“友情の大地”と宣言して、アフリカ大地溝帯から人類が世界中に歩いて拡散した頃のような国境もない世界を目指したいね」と大笑いをして電話を切ったのもつい先日。困るほどに優しく苦しいほどに律儀な二人に今や日本ではなかなかに見い出せない誠実で謙虚なアジアの心を知る思いがする。(おわり)

平成17年11月17日発行
社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台 3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ 502
発行責任者：及川 伊佐子
編集 集：事業部 03(3582)3021
印刷 刷：音和堂印刷(株)